

No. 1403

完全参加と平等を

— 国際障害者年記念集会 —

「完全参加と平等」をテーマに4月26、27日の両日、国際障害者年中央記念集会在大阪の万国博ホールで行われました。主催者を代表して中山総理府総務長官が「国際障害者年を今年だけの行事に終らせることなく地球が続くかぎり障害者の人々のために計画されるものです」とあいさつ。続いてキャラバン隊が紹介され、代表者の後藤則政さんが力強く決意表明。キャラバン隊は全国53ブロックに別れ5月6月の2カ月間街頭キャンペーンを行います。ことしは地球上のすべての人が互に手を取り共に幸せを願う国際障害者年。この意義ある1981年を明日に結ぶすばらしい年として実のらせたいものです。

ドイツ美術500年展

— 東京・新宿 —

「ドイツ美術500年展」が5月1日、東京新宿の小田急グランドギャラリーで開幕しました。この美術展にはドイツ民主共和国のシュペリー国立美術館など8つの美術館から油絵80点とデュラーの版画30点が出品されています。デュラーによって築かれたと言われるドイツ・ルネッサンス、それから約500年、現代にいたるドイツ美術の輝やかなしい伝統が系統的に再現されています。この美術展は5月27日まで開かれています。

ある裁判

— 台湾人元日本兵 —

沖縄県のはるか南に浮ぶ台湾。明治28年から昭和20年敗戦までの50年間、台湾は日本の統治下にあった。この時、台湾では日本語の教育が行われ、先の大戦では「天皇の赤子」といわれ、台湾の人々も軍人、軍属として銃を持たされた。その数21万人のうち約3万人が戦死し、戦傷者の実態は今日もはっきりわかっていない。現在、元軍人、軍属に対する補償は、恩給法、援護法、特別措置法の三法によって行われている。奇跡的に帰国した横井さんや小野田さんは、全国的な歓迎を受けた。しかし、中村輝夫さんの帰国には積極的な手はさしのべられなかった。ただ、台湾出身であるという理由だけで。今、「こうした扱いは余りにひどすぎる」と、かつての日本人である台湾の人々から戦争補償を求める訴えが東京地方裁判所に出されている。補償を求めたのは、鄧盛さん（台湾在住）ら13人であるが、日常の活動は、『台湾人元日本兵の補償問題を考える会』の会員ら日本在住の人々が肩がわりして行なっている。彼ら自身は補償によって1円でも得る訳でなく、むしろ逆に持ち出し覚悟でこの運動にかかわっている。昭和52年8月から審理されてきたこの裁判は今年の秋にも判決が下される見通しだ。日中国交回復と同時に、台湾との国交はとだえてしまった。それが問題を一層難しくしてもいる。戦争補償には国際問題もからみ複雑である。しかし、この裁判では同時に日本人の心がためされてもいる。